

# ひよくれんり 4

*Cbizuru & Masamune*

---

なかゆんきなこ

*Kinako Nakayun*



エタニティ文庫

目次

ひよくれんり 4

黒猫狂想曲

書き下ろし番外編  
初雪の朝に

333

309

5

ひよくれんり4

プロローグ 〈奥様の憂い〉

夫婦とは、互いを支え合うもの。  
それが私の考える『理想の夫婦』。

でも、あれ？ あれれ？

ふと、疑問に思う。

支え合う……。これ、私達夫婦は「できていないんじゃないか」って。

旦那様の正宗さんは私の弱いところを受け入れた上で、いっぱい支えてくれる。本当に、私には過ぎた人だとつくづく思う。

でも、私は……？

正宗さんのことは大好きだし（これは胸を張って言える）、あ、あい……愛してるけど（これはちょっと人様の前で言うのは気恥ずかしい……）、私の場合、想いばかりが先行して彼の支えにはなれていないんじゃないか？

これまでの夫婦生活を思い出してみる。

む……むむむむ……

み、見事に……迷惑をかけては正宗さんにフォローされ、パニックでは正宗さんにフォローされ……

薄々感じてはいたけれど、私ばかりが、正宗さんを頼っている。

私、ちよっと旦那様に「おんぶにだっこ」すぎやしないか？

私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、お見合いで柏木正宗さんと出会った。

親に無理やりセツティングされたので、私は全然乗り気じゃなかったんだけど、目の前に現れたのは、「えっ？ どうしてこんな人がお見合いに？」と思うくらい素敵な男性だった。

長身にサラサラの黒髪、整ったお顔にとっても似合う眼鏡。ええ、実は私、黒髪眼鏡の男性が好物でして！ 正宗さんは、ど真ん中のタイプだったので！

その上性格も穏やかで優しいという、完璧なイケメン高校教師がお見合いの席に現れ、私は「きっとこの人も私と同じで、無理やり駆り出されたんだろうなあ。この場限りに違いない」なんて思っていたから、その後交際に発展するとは思ってもよらず！

だって私、自分で言うのも虚しいですが、普通の女ですよ。

身長は百五十二センチでチビだし、胸は……ささやかだし。顔立ちだって平凡。

そんな私ですか？ イケメン眼鏡男子と結婚を前提にお付き合いすることになるなんて！

恋愛経験なんてほぼなかったから、毎回のデートは緊張しっぱなしで……でも、そうやって二人で過ごすうちに、正宗さんのことを本気でね、好きになったんです。

奇跡的にも、正宗さんも私のことを好きになって下さったみたいで……

そしてプロポーズを経て、出会ってから約半年という早さで結婚しました。

今は、正宗さんの亡きお祖父様から譲り受けた一戸建ての日本家で一緒に暮らしている。ずっと憧れていた縁側もあるんだよ！ 少し古いけど、落ち着く我が家です。

出会いから結婚までの期間が短かったから、私達の新婚生活はまだお互いを探っている面があったと思う。

けれど、結婚後も恋愛期間が続いているようなドキドキ感と新鮮さがあつて、うん……幸せな日々だった。って過去形にすると、今が不幸せみたいに聞こえるけど、違います！ 今も幸せです！ ……って惚気てんじゃねー！ って感じですよね、すみません！

それはさておき、結婚してからもいろんなことがあつた。

妊娠したかもしれないって思った時——私は喜びよりも不安でいっぱいになって、パニックを起こしてしまった。怖くてしょうがなくて、そんな自分が大嫌いになって……けれど、正宗さんは私の弱さを受け入れてくれた。

もうすぐ結婚して一年経つので、周りから「そろそろ、赤ちゃんは？」って言われることが多くなった。本音を言うと、今でも不安はあるし、怖い。

けれど、正宗さんとなら乗り越えられるんじゃないか。何より、彼との子どもが欲しい！ って、心から思えるようになった。

それから、ずっと隠していた私のオタク趣味（しかもただのオタクじゃなくて、男性同士の恋愛——ボーイズラブが大好きなんです！）が予期せぬ形でバレてしまった時、反射的に逃げ出してしまった私を追いかけてきて、「驚いたけど、こんなことで嫌いにならない」って言ってくれた。

今思い返すと悶絶してしまうような記憶ばかりだけれど、そんな積み重ねが今の私達の関係を作ってきたんだ。

私は前の自分より、今の自分が好き。ちゃんとした大人だって胸を張っては言えないけど、少しずつ成長できてるって思う。

私にはもったいないくらいに旦那様に、「私なんかでいいのかな……」って悩むこともあつたけど、今は、うじうじ悩むくらいなら自分を磨く努力をしよう！ って、前向

きに考えられるようにもなった。

それは全部、正宗さんが支えてくれたおかげ。

正宗さんと出会って、私はいいい方向に変わった。とても幸せなことだと思う。でも、待って？

正宗さんは弱音を吐かない。仕事の愚痴ぐちすら言わない。

それは正宗さんが強い人だから……なのかもしれない。

だけど誰だって、悩んだり、苦しんだりするでしょう？

そんな時、正宗さんは私を頼ってくれていないような気がする。

私じゃ力不足……だからなんだろうか？

私は……正宗さんの支えに、なれないんだろうか？

## いい夫婦の日

十一月に入ると、すっかり冷え込みますよね。

私達の住む街はあまり雪は積もりませんが、吐く息がしっかりと白くなる程度には寒い  
です。

鍋おひたが美味しい季節だなあ……

そんな十一月も半ばなかを過ぎたある夜のこと。私は鶏団子鍋とりだんごを用意して旦那様の帰りを  
待っていた。

「ただいま帰りました」

(あっ！ お帰りだっ！)

玄関から響く旦那様の声に、私は忠犬ちゅうけんよろしくいそいそと玄関へお出迎えに行く。

えっへっへ。今夜は寒かったでしょう！。温かいお鍋であっつまりましょうね！。

……って、おや？

チャコルグレイのトレンチコートを纏まとった正宗さんが、ピンクの薔薇ばらの花束を持つ  
ている。

何故に!? あれっ? 今日って何かの記念日だったっけ?

「今日は『いい夫婦の日』なんだそうですよ」

いいふうふのひ……?

今日は……十一月二十二日……あつ!

語呂合わせで『いい夫婦』か!

ええええ!? でもなんで!? なんで花束!?

「俺も今日、駅のポスターを見て知ったんですが。今日は伴侶ほんりょうに日頃の感謝を伝える日、なんだそうです。いつもありがとうございます、千鶴さん」

まっ、正宗さんんん!!

やばい泣きそう! 『日頃の感謝』だなんて……! 普段は花より団子を地じで行く私ですが、やっぱりお花をもらえるのって嬉しいー!!

「ありがとうございます! 嬉しいです!!」

わー! お花どこに飾ろうっ? やっぱりお茶の間かな?

花瓶かびん、花瓶かびんっつと……  
(はっ!)

……って! 浮かれている場合ではない!!

わ、私何も用意してない! (なんせ今知ったからな!)

私だって正宗さんにめーっちゃめっちゃ感謝してるのに!!

どうやったら、その気持ちを伝えられるんだろう……?

ううう……。せめて今日のお夕飯を正宗さんの好きなメニューにすればよかった……

今から作り直したら、正宗さんをお待たせしちゃうし……

私はどうしたものかと悩みながら、いただいた花束を花瓶かびんに生け、お茶の間の棚の上に飾った。

正宗さんはスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを解ほどいて、鍋の載った炬燵こたつの中に入った。

私も炬燵に入り、二人で鍋をつつく。

ごはんを食べ始めてからも、正宗さんに何をプレゼントしたらいいかばかり考えてしまっ。

でも、もう夜……だし。今からは買いに行けないしな……。んむむ……

じゃあ、物じゃないモノをプレゼント?

えーと……。マッサージ券とか……。? って! 小学生か!! 父の日や母の日の小

学生か!!

でもっ、本当に肩たたきとか、腰をもみもみとか、お背中お流しします〜、くらいしか思い浮かばない!!

はっ! もういっそ、『日頃の感謝を込めて、私、正宗さんの言うことなんでも聞き

ます!』はどうだろうか? (やはり発想が小学生レベルー)

「……なんでも、ですか」

「はいっ！」

「……………それじゃあ……………」

ドキドキしながら正宗さんの言葉を待つ私に、彼は爽やかな笑顔で仰るの。

「ご奉仕、してくれませんか？」

そして正宗さんが指差す先には、そそり立つ正宗さんの、アレ。

「そんな……………」

私は恥じらいながらも、頑張つてご奉仕…………

つてええええええ!!

「ごふっ」

夕飯時に何を破廉恥な妄想してんだ、このお馬鹿!!

飲んでいたお味噌汁、ちよつと噴いちゃったし!

まっ、正宗さんはそんな……………そんなエロいこと言わないよ! ……たぶん。

「大丈夫ですか? 千鶴さん」

「はっ、はひっ」

脳みそは大丈夫じゃないですけど大丈夫です!

心配無用であります!

(ううう……………っ!)

結局、妙案は浮かばないまま…………

私は食後、炬燵でまったりとテレビを見ておられる正宗さんに、

「お花、本当にありがとうございます! ……ありがとうございました! ……それで、あの、私も正宗さんに、日頃の感謝を込めて、その……………何かお贈りしたいのですが……………」

と、しどろもどろに言う。

「そんな……………。気にしないでいいんですよ」

「いえいえ! ……だって私、本当に正宗さんに感謝してますもん!」

こんなに素敵な旦那様と一緒に暮らすことができ、どうして感謝の気持ちを伝えずにいられようか。

「だっ、だけどその……………私には正宗さんに差し上げられるようなものがなく……………。なので! ……なんでも言うことっ、聞きます!」

「え……………」

ええーい! ……結局これしか思い浮かびませんでしたあ!!



肩もみでもマッサージでも、ごっつ、ご奉仕……でも！ なんでもどんとこーい！！  
 なんて意気込む私に、正宗さんはしばし考えたあと、「それじゃあ……」と、あるり  
 クエストをなさったわけですが……

「え……ええと、正宗さん。本当によろしいの……でしょうか……」

「はい。あ、狭い……ですか」

「いつ、いえ！」

現在正宗さんは、私を後ろから抱っこした状態（つまり正宗さんが私の座椅子状態）  
 で、炬燵こたつに入っております。はい。一緒に入っております。

これが正宗さんのリクエスト……

何故!?

（……おおうふ……）

正宗さんの顎が、私の頭にちよんつと乗っかっている。

背中が正宗さんの胸に当たって、ちよつと気恥ずかしいけれど、とても温かくて心地

良い。

でもこれ、正宗さんにいったい何のメリットが？

ちら……と窺うかがうと、正宗さんは上機嫌そうだ。わからない。イケメンの考えることは、  
 マジわからない。

とは言っても、これだけじゃあ申し訳ない……よね。何かしないと！

そう思い、私は炬燵の上に置いてある籠かごから蜜柑みかんを一つ手に取って剥き始めた。

冬はやっぱり炬燵で蜜柑だよねえ。ついつい食べすぎちゃう。

白い筋も丁寧ひとかまに取って……。一房、外して……

「正宗さん、はいどうぞぞ！」

旦那様の口元へ！

「……………」

正宗さんはちよつとびっくりしたようなお顔をされたあと、目元を緩ゆるめて口を開けた。  
 きゃあああ！ その微笑！ 至近距離だとさらに破壊力アップ！

「……ん。美味おいしいですね」

「つ……は、はい。この蜜柑、甘いですよねっ」

ひいひい！ て、照れる！ 自分でやっておいてなんだけど、照れるなあこ

れ……っ！

（あ……）

ふと、思った。

もし子どもができたら、こんな風に二人つきりでのんびりする時間はとれなくなるん  
 だらうなあ。

そう考えると、こうして二人つきりでいられる時間が無性に愛おしく、大切なもののような気がしてきた。

も、もちろん「ずっと二人でいたいから子どもは作らない！」ってわけではないですよ！

正宗さんの子ども、欲しいし……。ただ、こうして二人でいられる今の時間も大事にしたいなって思ったんだ。

「ま、正宗さん」

私はもう一度、正宗さんの口元に蜜柑みかんを持っていく。

「はい、アーン」

正宗さんにはっこり微笑ほほえんで、アーンと口を開けてくれた。

それから正宗さんも蜜柑を剥むいて、私に食べさせてくれたのでした。

\* \* \*

(……いい夫婦の日?)

俺は学校からの帰り道、駅のポスターを見て、十一月二十二日は『いい夫婦の日』なのだと知った。

そのポスターは、どうやら駅構内にある花屋が貼ったものらしい。男性が女性に花束を渡している様子が温かみのあるタッチで描かれている。

なるほど。『いい夫婦の日』は、伴侶はんりよに日頃の感謝を伝える日なのか。

そんな日もあるんだな。

(……日頃の、感謝……)

花……か。

思えば、千鶴さんに食べ物みえけを土産に買って帰ることはあるが、花束を買って帰ったことはないな。

(……喜んでくれるだろうか……)

我ながら感化されやすいと思いつつも、俺はすぐにその花屋に向かった。

店内には、俺と同じようにポスターにつられてやって来たのか、数人のサラリーマンらしき男性客がいた。彼らも、家で待っている奥さんに花束を買って帰るのだろうか。

レジカウンターが空あくのを待つ間、店内の花を眺める。

「……………」

目に入ったのは、千鶴さんのイメージにぴったりのピンクの薔薇ばらだ。

派手ではないけれど、可愛らしい。つつい、目元めもとが緩ゆるむ。

カウンターが空くと、俺は店員さんに声をかけた。

「すみません。あのピンクの薔薇をメインに、花束を一つ」

「ありがとうございます。奥様に、ですか？」

すぐに『奥様に』という言葉が出てくるなんて、今日はいったいどれくらいの方がこの店で花束を買ったのだろう。

「はい。可愛い雰囲気の花束を、お願いします」

「かしこまりました！」

店員さんは「お任せ下さい！」と頼もしい返事をしたあと、イメージ通りの可愛い花束を作ってくれた。

花束を持って、家路につく。

……こんなことをするのは初めてだから、少し気恥ずかしい。

だが、この花束を渡した時の千鶴さんの表情を想像すると、気持ちが高揚して恥ずかしさが吹き飛び、俺は足を早めた。

(きつと、びっくりするだろうな……)

「ただいま帰りました」

玄関の扉を開けて、一声。

するといつものように、千鶴さんが玄関までたたたと駆けてきた。

想像通り、千鶴さんは俺が抱えている花束を見て驚いている。

そんな彼女に、花束をぼんと手渡した。

「今日は『いい夫婦の日』なんだそうですね」

千鶴さん、まだびっくりしてるな。目がまんまるですよ！

「俺も今日、駅のポスターを見て知ったんですが。今日は伴侶に日頃の感謝を伝える日、なんだそうですね。いつもありがとうございます、千鶴さん」

俺は感謝の気持ちを込めて、彼女に言った。

「ありがとうございます！ 嬉しいですよ!!」

いえいえ。こんなに喜んでもらえて、俺も嬉しいです。

千鶴さんは花束を花瓶に生けたあと、時々視線を花にやっっては、にっこりと微笑んでいる。

気に入ってもらえてよかった。

……千鶴さんのこんなに嬉しそうな顔が見られるなら、これからもたまに花束を買って帰ろうかなんて思いながら、夕飯を食べる。

今日は鍋なんですね。冷えた身体に熱々の鍋が美味しいです。

夕食を堪能したあと、炬燵に入ってテレビを見ていたら、千鶴さんが何やらそわそわ

しでした。

「お花、本当にありがとうございます！ それで、あの、私も正宗さんに、日頃の感謝を込めて、そのっ……何かお贈りしたいのですが……」

「そんな……。気にしないでいいんですよ」

お返しが欲しくてしたことじゃないですし、喜んでもらえたのが何より嬉しかったので……

「いえいえ！ だって私、本当に正宗さんに感謝してますもん！」

(……俺は本当に幸せ者だな……)

「だっ、だけどその……私には正宗さんに差し上げられるようなものがなく……。なので！ なんでも言うことっ、聞きます！」

「え……」

なん……でも……？

俺の奥さんは、意識しているのかしていないのか、時々とても大胆なことを言う。

(……なんでも……か……)

正直、普段は恥ずかしがってやらないあんなこととか、滅多にしてももらえないこんなこととかが頭を過った。俺も男だからな……

だがこの時の俺は、無性に……

「え……ええと、正宗さん。本当によろしいの……でしょうか……」

「はい。あ、狭い……ですか」

「いつ、いえ！」

この可愛らしい人をぎゅっと抱き締めていたくて、千鶴さんを後ろから抱いて炬燵に入った。

俺の腕の中につっぱりと収まる、彼女の小柄な身体。

千鶴さんの小さな頭に顎を乗せて、くつろぐ。これ、結構落ち着くな……

世の女性が大きなぬいぐるみを抱き締めたがる理由が、今ならわかる気がする。

(……ん？)

居心地悪そうにしていた千鶴さんが、突然蜜柑を手にした。この蜜柑は炬燵と一緒に置かれるようになった、我が家の冬の風物詩だ。

千鶴さんはまず、手の中で蜜柑をこころと転がし、皮を剥く。そうすると房が皮から離れて剥きやすくなるのだそうだ。

そして、丁寧に白い筋を取って……

「正宗さん、はいどうぞ！」

「……………」

自分で食べるのかと思いきや、最初の一房を俺にくれた。

「ありがとうございます」

自然と目元が緩んでしまう。この人は本当に、俺を喜ばせるのが上手だ。俺はアーンと口を開けた。

「……ん。美味しいですね」

口の中いっぱいに、蜜柑の瑞々しい甘さが広がる。

「つ……は、はい。この蜜柑、甘いですよねっ」

確かにこの蜜柑は甘いけれど、こんなに美味しく感じられるのは……

「あなたが剥いてくれた蜜柑だから、ですよ。千鶴さん」

「ま、正宗さん」

千鶴さんはもう一房、蜜柑を差し出してくれた。

「はい、アーン」

と言いながら、俺が口を開けるのを促すように自分も一緒に口を開ける。

「可愛いなあ……」

ついつい相好が緩んでしまうのを隠せないまま、差し出された蜜柑を食べた。

そして俺も、蜜柑の籠に手を伸ばした。

奥さんの唇に、その橙色の一房を運ぶために。

クリスマス・イブは二人で……

「ふんふんふーん、ふんふんふーん、ふんふんふーん♪ ハイ！」

私は鼻歌を歌いながら、両手に持っていたエコバッグを台所の食卓にどさつと置いた。はあく。重かったあ……

でも今日はクリスマス・イブだし！ いっぱいごちそう作らなきゃー！

季節が巡るのは早いもので、もう十二月も残りわずかか。

正宗さんと結婚して、二回目のクリスマスがやってきた。

去年のクリスマス・イブは土日だったし、新婚ほやほや！ ってこともありまして、正宗さんがホテルを予約してくれてね。ホテルでクリスマスディナーを堪能したあと、お部屋で一泊しまして、それはもう素敵なクリスマスを過ごしたのですよ。

「……ドキドキしっぱなしだったな……」

買ってきた食材を分けながら、ちょうど一年前のことを思い返す。

【一年前のクリスマス・イブ】

(……あわわわ……)

私はよそ行きのワンピースの上からお気に入りのコートと羽織り、少しヒールのある靴を履いた。指には、もちろん婚約指輪と結婚指輪をはめている。

お化粧もばっちりして臨んだ、ホテルでのクリスマスパーティー。

レストランのテーブルに運ばれてくるフレンチは、宝石のように綺麗だった。

(おうふ……)

自分、場違いじゃなかるうか……とめっちゃ緊張しました。

ちら……と向かい側に座る旦那様を見ると、彼は微笑を浮かべながら、品のいい仕草で料理を口に運んでいらっしやる。

はあ……。なんて絵になる人だろうか。私は正宗さんのきらつきらしめたイケメンオーラにドキドキしつつ、ナイフとフォークを手にして料理を口に入れた。

(……美味しいっ……)

テリーヌはニンジンとインゲンが添えてあって、クリスマスカラーになっている。可愛いなー。

「……美味しいですか？」

「はいっ」

高級レストランなんて、めっちゃ緊張するけど……

滅多に来れる場所じゃないんだから、楽しまないと損だよ。

プロポーズしてもらった日に行ったレストランでは、緊張のあまり、せっかくの美味しい料理をちゃんと味わえなかったしな。

そんなこんなで美味しいクリスマスディナーとワインを堪能したあと、今日宿泊するお部屋へ移動した。

こんな素敵なホテルに泊まれるなんて、ちょっと……いやかなりドキドキします。

おずおずと部屋に入ってみると――

「わーっ！」

大きな窓から見える街の夜景がとっても綺麗！

ホテルの庭のクリスマスイルミネーションも、綺麗だなあつ！

私は子どものようにべったりと窓に張り付いて、夜景に見入った。

「すごいすごい！ 素敵ですー！！」

「喜んでもらえてよかった」

そして正宗さんは、ネクタイを解きながら……

「先にシャワー使いますね」

と仰った。シャワー？

「は、はい」

そう頷くと、正宗さんは浴室へと向かった。先に、ということとは、次は私がシャワーを浴びるということ。ホテルでシャワー……。つまり……

「セック……っ」

ほぎゃああああああああ!! これ、セックスフラグ! フラグが立ってる!! (いやそうじゃなくても、一泊するんだからシャワーくらい浴びるけれども!)

何を今更!? と思うよね。うん。私も思う!

だけど、この時の私は脱処女して一ヶ月余り。

つまり、まだそういうことに免疫がないわけです。

でもクリスマス・イブにホテルに一泊するってことは、つまり、そういうこと……だよな?

「おうふ……」

クリスマスディナーと夜景に浮かれていた頭が、一気に冷静さを取り戻す。

いや、あの、正宗さんとそういうことするのが嫌なわけじゃないんですよ?

嫌とかじゃ、なくて……

「恥ずかしい……」

そう。無性に恥ずかしいのです。

こんな素敵なホテルの一室で、豪華なダブルベッドの上で……なんて。まるで恋愛小説のワンシーンのようじゃないか。

ここで私は、今夜、自分にはもったいなさすぎる素敵な旦那様に……だ、抱かれるんだよね……

正宗さんは、バスローブを纏って部屋に戻ってこられた。

そのお姿に本気で鼻血を噴くかと思っただけ押しつつ、私もシャワールームへ。

(だって! バスローブですよ!? 超エロいよ!)

……旅館でエッチ、は初夜で体験したけど、思えば私、ホテルでエッチはこれが初めてだよ! わああああああ

心臓、バクバクしてる……

気もそぞろにシャワーを浴び、正宗さんに倣ってバスローブを纏い、部屋に戻る。下着をどこまでつけるべきか悩んで、結局パンツだけ穿いた。

寝室に入ると、正宗さんがベッドに座ってシャンパンを飲んでた。シャンパンはクリスマス宿泊客へのサービスで、各部屋に用意されてるんだって。シャンパンはク

バスローブ姿でシャンパンを飲む正宗さん。なんて絵になる……っ!

「千鶴さんも飲みますか？」

「はっ、はひっ！」

上擦った声で返事をする、正宗さんは苦笑した。

「そんなに緊張されると……。なんだか俺も緊張してしまいますね」

彼はちっとも緊張しているとは思えない余裕な仕草で、もう一つのグラスに黄金色のシャンパンを注いでくれる。

しゅわっと口の中ではじける炭酸に、ほろ苦いお酒の味……

「……………ほわあ……………」

美味しいです、って言おうと思つて顔を上げると……

「んっ」

正宗さんに唇を奪われた。

ちゅっ、ちゅちゅ……と、私の口の中にわずかに残るシャンパンを吸い尽くすみたい  
に、彼の舌が蠢く。

「あう……………」

グ、グラスっ！ シャンパン、零れちゃう……!!

私は口付けを受けながら、ふるふると手を伸ばしてグラスをテーブルに置こうとした。  
すると、それに気付いた正宗さんがふっと苦笑して、私の手からグラスを取る。そし

て、それをテーブルに置いてくれた。

……………って、ま、まだチューをするのですか、あわわわわわわ……………!

正宗さんのバスローブを掴んで深い口付けを交わしていたら、ふわっと身体が浮いた。

「なっ……………」

(お、お姫様だっこ……………! だと!?)

そう。いわゆるお姫様だっこをされた私は、ベッドの上にとさっと優しく落とされ、  
押し倒されました。

「ん……………」

それから、バスローブをゆっくりと脱がされる。

「……………」

正宗さんは露わになった私の肌をじっと見つめた。

え、え……………? なんか変ですか? やっぱりブラはつけておいた方がよかったんで  
しょうか!?

「すごく綺麗……………です」

正宗さんの瞳がふっと細められ、低い声で囁かれる。

「ふえっ!?!」

き、綺麗? そんな、馬鹿な!



綺麗なのは……

「正宗さんの方……ですよ……」

艶やかな黒髪。整った鼻梁、綺麗な瞳。

うっとりしちゃうくらい、恰好良い旦那様……

私はぎゅう、と正宗さんに抱きついて、

「……だっ、大好き……です。正宗さん……」

と、顔を真っ赤にしながら囁いた。

それで、できればその……

「……電気、消してもいいですか……?」

こんな明るい所で、自分の裸とか痴態を晒すのはまだ抵抗があるのです……!

「……はい」

正宗さんは苦笑して、ベッドの枕元にあるつまみをひねり、照明を落としてくれた。

薄暗くなると、外の灯りが差し込んできて、なんだかこう……怪しげな雰囲気ですね。

ド、ドキドキする……っ。

「俺も大好きです。千鶴さん」

そう言っ、正宗さんはもう一度キスをしてくれる。

正宗さんの舌、熱い……

シャンパンのせいか、はたまた先程のキスのせいか、頭がほわっとしてしまう。

「ん……っ、んあ……っ」

ちゅぶっ、ちゅ……っ、と、角度を変えて攻められる度に、二人の唾液がいやらしく混じり合い、私の口の端から垂れてしまった。正宗さんはそれに気付くと、にいと笑い、べろっとなめとる。そして再び唇を啄ばんだ。

そんな風にキスを交わしているうちに、気付けばバスローブはすっかり脱がされていた。

正宗さんも裸になっ、互いの身体を温めるように抱き締め合う。

素肌と素肌をくっつけるのは、恥ずかしいけど……心地良い。

ずっとこうしていたくなるくらいだ。

「んう……っ」

やがて正宗さんの唇は、私の首筋を辿り始めた。まるで一筋の線を描くように、舌先がつうつと伝っていく。

鎖骨の窪みを舐められた時、びくっと身体が震えてしまい、正宗さんの舌が止まった。

「あ……」

「ここ、気持ち良かったですか?」

笑みを浮かべた正宗さんが、再びそこを舌で舐める。

ひっ、ひあっ……。な、なんで？ 他の場所を舐められた時には感じなかった、ゾクとした快感が走る。

「んっ」

し、しかも正宗さん、そこをひとしきり舐めたあと、ちゅ、ちゅうって！ す、吸いつくし！

「はう……………」

痛いくらいに肌を吸われた。こ、これ絶対痕あとになってる！ キ、キスマーク、つけられた！

「綺麗な色ですね」

「うう……………」

正宗さんは痕をつけた部分を満足げに撫なでていくけど、場所が場所なだけに私には見えないのです。あ、あとで鏡見るの怖いな……………」

痕を残すのが気に入ったのか、正宗さんはそれからも首筋や胸元を強く吸っていった。眉が寄ってしまうくらい痛いのに…………、どうしてか痕を残される度、自分が正宗さんの色に染め上げられていくような気がして、嬉しくもあった。

「ああっ……………」

正宗さんの手がやわやわと私の胸を揉もみしだく。

自分で触ってもなんとも思わないのに、この人の手に触れられるだけで腰が抜けちゃいそうになるから不思議だ。

そして頂いたさに口付けられ、恥ずかしい声を上げてしまっ

だ、だめえ……………！

「んっ！」

さらに、ちゅううつと頂に吸いつかれて、びくびくつと身体を震わせる。

あっ、ああっ…………。す、吸わないでっ…………

胸の頂はすっかり勃たち上がっている。はず、恥ずかしい…………

攻められているのは胸だけなのに、秘所がじんわりと濡れ始めているのがわかった。

「千鶴さん……………」

はあ…………という吐息と共に、耳元で名前を囁ささかれる。その低く甘い声に酔いそうになった。

ぼうつと身を委ゆたねていると、正宗さんの手はやがて胸元を離れて下腹をなぞり、ソコに触れた。

「ふあ…………っん」

くちゅ…………つと、水音が響く。その音がやけに大きく聞こえて、私は恥ずかしさにかつと熱が上がったような気がした。

くちゅ……ぐちゅり……

指で弄られる度に、その水音はどんどんいやらしさを増していく。

「ああああ……っ」

「気持ち良い、ですか？」

そっ、そんなこと、素敵なお声で聞かないでええええええ！

ますます感じてしまう……

さらに、正宗さんの指は徐々に激しく秘所を攻め立ててきた。

「……ね、千鶴さん……」

ぎゅっつと目を瞑る私の脛に、温かな口付けがちゅっつと落とされる。

「気持ち良いって、言って……っ？」

はうううっ！ そ、そんな切ないお声でお願いされたら……わ、私は……っつ。

「……っ、き……もちいいです……っ。いい……っ……んん……」

涙を浮かべながら、喘いだ。気持ち良いのは本当だけど、「言わされている」っていう状況が、より快感を煽ってくるといいますか……

(……頭、痺れる……)

正宗さんの指にソコを暴かれて、身体をゾクゾクツツと震えが襲う。

絶頂が近付いているのがわかった

そして、私は……

「……やっ……い……いっっちゃ……っ」

指だけで、達してしまいました。

「はあ……はあっ……」

汗ばんだ身体で荒い息を吐く。

体力のない私は、すぐにゼーハーしてしまふのだ。

正宗さんはそんな私を気遣うように頬を優しく撫でたあと、すっかり準備の整った自身に手を添えて、ゆっくりと私のナカに挿入る。

「んん……っ」

硬く熱い正宗さんが挿入ってくる時の圧迫感にはまだ慣れない。

ただ、けして嫌なわけじゃないんだ。恥ずかしいけれど、ようやく繋がれたって嬉しく思う。

「……千鶴さん……っ」

正宗さんもはあっつと息を吐きながら、切なげに眉根を寄せている。

彼も気持ち良くなってくれてる、かな……？

経験の浅い私は少しだけ不安に思った。正宗さんにもいっばい、気持ち良くなっつてほ

しい。

「んっ。んん……」

正宗さんに揺さぶられる。

思わず手を伸ばすと、正宗さんがしつかりと掴んでくれた。嬉しい……

「はあっ……っ、は……っっ」

「ああっ……あっ……やあ……っっ」

薄暗い室内に響くのは、互いの肌が激しくぶつかる音。二人の吐息と喘ぎ声。そして淫らな水音。

「あっ！ ああっ……まさむねさ……っ、正宗さあ……ん……」

私は大好きな旦那様の名前を呼びながら絶頂を迎えた。

その時、きゆううつと正宗さんを締めつけてしまう。すると、正宗さんがゆっくりと抽送し、ナカに熱い白濁を注ぎ込んだ。

「はあっ、はあっ……」

ずりゅ……っつと、私のナカから正宗さんが抜けていく。

……ちよつとだけ寂しい。

「千鶴さん……」

労わるような、優しいキスが額に落ちてくる。

正宗さんのそんなささやかな仕草の一つ一つが、たまらなく愛おしく感じられた。自分はこの人に大切にされているって思えて、胸がときめく。

「んっ……」

正宗さんが、甘えるみたいに頬を擦り寄せてきた。

か、可愛い……！ キュン死にしそう……！

(……あっ)

偶然触れた正宗さんのソレは、すでに元気を取り戻していた。

はう……。私は二回イッたけど、正宗さんはまだ一回……。だもんね。

ええっつと、つまり……

「もう一回、いいですか？」

「ひゃうっ！」

正宗さんの上目遣いとか！

破壊力ありすぎるよおおおおおおお！！

正宗さんのお願いを断れるはずもなく、私はその後も限界まで正宗さんと仲良くいたしまして。な、何回目かもう覚えていないけど、頭の中が真っ白になって、気を失うように寝入ってしまった。

ええ、それはもうグースカと。

翌日、私は朝霧の漂う早朝に、ベッドの中で目を覚ました。

二人とも裸のまま、抱き合って眠ってしまったらしい。

う、嬉しいような、恥ずかしいような……！

私は複雑な心境で、正宗さんの腕の中からそっと這い出た。

「あれ……？」

ふと違和感を覚えた。私の首に、何かがある……

私は床に落ちていたバスローブを羽織って、浴室に向かった。

灯りを点けて鏡を見ると、私の首にはネックレスがつけられている。

「これ……」

ピンクゴールドのチェーンに、同じくピンクゴールドのハート型をしたペンダントヘッドが揺れていた。しかも中央には、小さなダイヤが輝いている。

（かつ、可愛い……っ！ でもこれ、どうして……）

もちろん、ネックレスが勝手に私の首に巻き付くなんてホラーな現象があるはずもなく……

私は寝室に戻ると、ベッドで眠っている正宗さんに視線をやった。

「ま、正宗さん……」

これって、やっぱり……！

シャンパンの載ったテーブルの上には、昨夜はなかったジュエリーショップの箱が置かれている。さらにその箱の傍には、『メリークリスマス』のメッセージカードが添えられていた。

「ううう……」

クリスマスの朝、目が覚めたら首にプレゼントのネックレスが、なんて。

こんなロマンチックなクリスマスを過ごせようとは、この千鶴……

思いもしなかったですよおおおお！！

はっ！ 早くマグロを冷蔵庫に入れないと！ 感慨にふけりすぎた！

私は我に返って、食材をしまう作業に戻った。

ちなみに、この時頂いたネックレスは今も大事に使っている。

正宗さんとデートする時とか、ね。

身につける度、あの朝の嬉しさが甦ってきて、とつても幸せな気分になれるんだ。

そして正宗さんも、私が去年のクリスマスプレゼントに選んだ腕時計を今も使っている。

ただで正宗さんは、腕時計一つじゃ返しきれないくらい素敵なクリスマスプレゼント

トしてくれた。

だから今年は、私が素敵すぎるクリスマス・イブのお返しを正宗さんにプレゼントするのだ！と、はりきっているわけでありませう！！

二人で迎える二度目のクリスマス・イブの夜。

私は半日かけて作り上げたごちそうの数々を前に、達成感でいっぱいだった。

「で、できた……！」

マグロとアボカドのサラダに、クリームチーズとサーモンのカナッペ。ニンジンのポタージュスープに、ローストビーフ。そしてクリスマスといったらやっぱりチキン！というところで、骨付きのローストチキンもこんがり焼きましたよ〜！

それから、ミートソースとホワイトソース、そしてチーズを幾重にも重ねたラザニア。こつてりしたもののばかりじゃ……と思って、ラディッシュとキュウリのピクルスも作った。

料理本とか、ネットで見つけたレシピを片手にね、頑張ったよ！

いやー……

「ははー」

つ、作りすぎた……かなっ。二人分にしては多いけど、まあ少ないよりはいいよね！

ごちそうはたくさんあった方が嬉しいし！！

それにケーキ作りにも挑戦してみましたっ……！

チョコレート味のスポンジを焼いて、半分に切る。間に挟むのは生クリームとカットした苺。挟んだあと、生クリームを全体に塗る。

これがまた難しくて！それでもなんとか塗り終わりました。

最後にクリームでデコレーションして、その上に苺を飾っていく。

うん！完成〜！！

お店のケーキに比べるとちょっと不恰好だけど、こういうのは気持ちが一番大事！あと、味も悪くない……はず！

さて、正宗さんが帰ってくるまでにテーブルセッティングを終わらせよう。

冬はお茶の間の炬燵で晩ごはんを食べることが多いけど、今日は洋風ダイナーだしと思いい、台所の食卓の上を綺麗に片付けて、この日のために買っていただいたテーブルクロスを掛けた。

そして、とっておきのお皿やグラスを並べていく。

「あ、そうだ！」

忘れるところだった。

同じく、今日のために買っていただいたミニツリーを食卓の上へ。

そうなのです。この家にはツリーがなかったのです。

うちの実家もなあ、昔は飾ってたんだけど、私や弟が大きくなってからは飾らなくなっちゃって。今はどこにあるのやら……（たぶん物置の奥深く、だな）

正宗さんに聞いてみると、お祖父さんとお祖母さんは、特にクリスマスに何かするとはなかったから、この家にはツリーはないと思うって。正宗さんがこの家で暮らすようになった時には、正宗さんももう大きかったし、クリスマスを祝うってことも、この家ではあまりなかったらしい。

『ああ……でも幸村がゆきむらよく家に押しかけては、「クリスマスだ！」って騒いでいきましたね』

幸村——幸村真まことさんは、中学時代からの正宗さんのご友人で、今も同じ職場に勤めていらつしやいます。ちなみに、幸村先生は養護教諭です。

これまでにも、よくうちにごはんを食べに来たり飲みに来たり、一緒に旅行に行ったりもして、仲良くさせてもらっている。

なのに、そんな迷惑そうに言わなくても……。でもちよつとだけ懐かしそうに語る正宗さんに、ついついニヨツとしてしまいました。

まあそれはともかく、今はまだ二人だけだから、小さいもので十分かな？ と思つてこのミニツリーを買ったけど……

もし私達の間子どもができたら、おっきなツリーを買って、毎年家族で飾りつけをして、さ。

誰がてっぺんの星をつけるかで争ったりして。

で、飾りつけが終わったら、ツリーを見ながら一緒にごちそうを食べたりしたい……。な、なんて。

「きゃー！ 幸せ家族計画!!」

思い描いた未来に、なんだかちよつと照れ臭くなって、私はセツティングしたばかりの食卓をバンバンと叩きながら（危ない危ない）、正宗さんの帰りを待ちました。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさい！」

おや？ ご帰宅された正宗さんの腕の中に、ラッピングされた箱が二つある。

「ワインとシャンパン、買ってきましたよ」

「きゃー！ 嬉しいです!!」

今日はクリスマス・イブだからって、酒屋さんがラッピングしてくれたんだって。

ワインとシャンパンをそれぞれグラスに注いだら、準備はオッケー！

二人っきりのクリスマスパーティーの始まりです。

「メリークリスマス！」

「はい。メリークリスマス」

私達は食卓に着き、乾杯しました。

「すごいごちそうですね。全部、千鶴さんが？」

「はいっ！ はりきつちゃいました。はは、で、作りすぎちゃいました……」

苦笑しながら、ワインを一口こくりと飲む。

んー、このワイン美味い！ それにシャンパンも!!

……でもふいに、去年の甘くてエロいクリスマス・イブを思い出して、顔が火照っちゃう……ね。たはは……

あ、そうだ料理！ 料理食べて下さい、正宗さん！

「いっぱい食べて下さいね！」

「はい」

正宗さんは、どの料理も「美味しいです」と言っ、本当に美味しそうに、いっぱい食べてくれた。それを見ると、私もついつい箸が進んでしまう。

ここにはBGMなんてないし、家の台所だし、一流のシェフ達が作る料理には遠く及ばないけれど……

「美味しいー！」

私はすっごく、すっごく楽しくて。嬉しくて。

幸せすぎて、なんか涙が出そうになるな、なんて思いながら、ばくり！ と骨付きローストチキンにかぶりついた。

食後、私はいそいそと、冷蔵庫から少し不恰好なクリスマスケーキを取り出す。

「あの、実はケーキも焼いてみました」

「えっ。それはすごいですね」

いえいえいえいえいえ!! と、私は高速で手を横に振った。

あの、ケーキっていつても、そんな本格的なものじゃないんで！

そんな風に驚いてもらえるのが申し訳ないくらい、あの、初心者向けのレシピで作ったやつなんで！

恐縮しつつ、私は手作りケーキにナイフを入れる。

ああああ……、断面はやっぱり売り物のケーキと違って不恰好だなあ。綺麗な層になってない……

やっぱりお店で買った方がよかったかな……なんて、ちょっぴり後悔しながらお皿に取り分けて、正宗さんに差し出す。

「……………」



正宗さんがケーキを頬張るのを、ついガン見してしまった。

ま、美味くないですか……？ スポンジはホールのものを作ったから、味見できなかったんだよね。(クリームはちょっと舐めたけど……いや、舐めすぎた気もするけど。だってつい、ね)

い、一応正宗さんの好みに合わせて、生地はビターチョコレート味にして、クリームも甘さを控えめにしたんだけど……

「……あの……」

「美味しいです。千鶴さんはすごいですね」

「ひゃっ……」

ほ、褒められたあああああ！

う、嬉しいよおおおおお！！

「……へへっ」

やばい！ 顔がにやけてしまう。

私にはやけ顔のまま、ケーキをばくっと口に入れた。

母の甘酸っぱさと、生クリームの甘さが口の中で溶け合う。

初めて自分で作ったクリスマスケーキ。……うん！ 美味しい……です！ よかったあ！

「……あ、千鶴さん」

「ふえ？」

ケーキは別腹だよねえ、なんて自分に言い訳しながらばくばくとケーキを食べていたら、正宗さんに呼ばれた。

なんだろう？ と思ったら、正宗さんはご自分のお鼻をちょん、と指差す。

「クリーム、ついてますよ」

「え？」

それはつまり、私の鼻にクリームがついてるってこと？

「ええっ!？」

なんと間抜けなっ……！ 私とれだけ食べるの下手なの!? 恥ずかしいー！ 慌てて鼻を擦る。……でも、あれ？ あれれ？

クリーム、ついてない……？

「……ははっ」

きよとんと首を傾げる私を見て、正宗さんが笑い声を上げた。

あっ！ ああああああ！

「まっ、正宗さん！」

嘘を吐いたんですね!! 酷い！ 本気で焦ったのに!!

「すみません。つい……」

「もおおお！」

まだ笑ってるし！

……っていうか、気付け私！ さすがに鼻にクリームをつけるほどがつついていないし、ついてたら感触でわかるだろー！

ケーキを食べたあとは、残ったピクルスや料理をおつまみにお酒を楽しんだ。  
 (うー、このワイン本当に美味しい！ ワインにハマりそうだよ……)

幸せな気分になりながら、いつもより遅い時間にお風呂に入る。そして、先に入浴を済ませて寝室でくつろいでいる正宗さんのもとへいそいそと向かう。

——そんな私は今、パジャマではなく、ある衣装を着ております。

そして手には、クリスマスプレゼントを持っております。

ちなみに今年のプレゼントはね、手袋とストールにしてみました。手袋は黒の革のやつで、ストールは綺麗なライトブルー。正宗さんのコートに似合うと思って買ったんだ。

ただこれだけじゃまだ、去年の素敵すぎるクリスマス・イブのお返しにはならないんじゃないか、って不安に思った私は、一週間ほど前に幸村先生に相談したのです。

「正宗さんに素敵なクリスマスをプレゼントしたい」と相談した私に、幸村先生はに

やあっと笑ってから(いや、ホントに「にやあ」って笑ったんだって！)、「俺に任せろ！」と胸を叩いた。

そして一昨日の夜、正宗さんが帰宅する前にこっそり我が家を訪ねてきた幸村先生に、『ちよっと早いけど、これ、俺からちーちゃんにクリスマスプレゼントね！』と、今私が着ている物を渡されたのだ。

幸村先生曰く、「これを着て『私がプレゼントです』って言えばオッケーだよ」と。  
 (ふぐぐ……。着てみたものの……や、やっぱ寒い。いろんな意味で……)

めっちゃイイ笑顔で、親指をぐっ！と立てた幸村先生に乘せられて着てみたけれど……この期に及んで、「やっぱりまずいんじゃないや……」と躊躇ってしまっ。

私が今着ているのは、胸元とスカートの裾に白いもこもこがついている赤いベアトツブのワンピース。

そして頭には、赤いサンタ帽。

いわゆる、『サンタガール』のコスプレです。

最近のサンタ衣装って、いろんなデザインがあるんだね。これも可愛い……とは思ってた。だけど、けどね。あの、幸村先生……

これ！ スカートの丈、めっちゃ短いですけど!!

それにこの季節にベアトツブって！ 肩も背中も丸出し！ 露出過多!!

## 立ち読みサンプル はここまで